



TITLE:

京大広報 No. 553

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 553. 京大広報 2001, 553: 991-1008

ISSUE DATE:

2001-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196555>

RIGHT:



京大広報

No. 553

2001 .1



新年名刺交換会 関連記事本文996ページ



目次

21世紀を迎えて

総長 長尾 真992

大学の動き

新年名刺交換会996

部局長の交替等996

外国人研究者との懇談会の開催997

事務局消防訓練・年末特別消防演習行われる ...997

平成12年度の停年退職教官997

平成13年度予算案の概要1001

部局の動き

原子炉実験所

大阪府・熊取町合同防災訓練に参画1003

日誌1003

訃報1004

随想

棋の起源 名誉教授 旦代晃一1005

洛書

近頃思うこと 坂田完三1006

公開講座

終了報告

農学研究科森林科学専攻・木質科学研究所

公開講座「森と文化」1007

話題

2000年京都電子図書館

国際会議：研究と実際1007

原子炉実験所

理科教育学習交流懇談会の開催1008

京都大学広報委員会

21世紀を迎えて

総長 長尾 真

京都大学の教職員の皆様，21世紀初めての新春おめでとうございます。21世紀が平和で人類にとってよりよく発展していく世紀であることを祈りますとともに，またそのようにするべくお互いに努力していくことを誓いたいと存じます。



21世紀という世紀

さて21世紀はどのような世紀になるのでしょうか。我々は少なくともその前半の50年については予測をし，展望をもって進む必要があるでしょう。我々の希望と期待を実現すべき21世紀は，しかしながら，20世紀の前半が特に戦争にあげくれた困難な時代であったと同様に，困難な時代となっていくと考えざるをえません。

それは物事の価値観がゆれ動き，情報ネットワークの極端な発展によって世界の政治経済システムが不安定振動をするからというだけではありません。既にはっきりと予測されているように，CO₂ 排出を十分に制御できず地球温暖化が進むほかに，大気汚染，水質や土地の汚染が急速に進むと見られています。そして人口増加はますます進み，エネルギー問題，食糧問題，さらには水不足が深刻となることは明らかであります。全てが有限である中で，人口だけが増大し，生産活動，消費活動がますます盛んになり，地球を消耗しつつ方向に急速に進んでいるということは間違いのない事実であります。

人類全体に対して，この地球の危機的状況の認識を深め，これにどう対処していくかを示すことは，世界政治の問題であり，各国政府の自覚によらねばなりません。政治に対して進むべき方向性を与えるのは大学人の英知によらねばならないと思います。

残念ながら，今日企業のみならず，政治においても2，3年先さえよく考えずに，その時々の流れに身をまかせている状況でありますから，国際的な政治経済力学がどのように働いており，我国がどのような判断をし，世界に対してどのように働きかけていくべきかについては，我々大学人がリーダーシッ

プを発揮する必要があるものと考えます。こういったことは単に政治経済の分野に限らず，科学技術，医学，生命科学等を含む今日国力の源泉であるといわれているあらゆる分野において考えねばならないことであります。

一方では，大学は学問をそれ自体として発展させていく義務がありますが，そのためには社会や自然から十分なる栄養をくみあげなければならず，そのためには社会や自然の中に大きな根をはっていく必要があります。今日の学問は，根っここのしっかりしないひょろひょろと伸びた青白いひよわな木となってしまうのではないのでしょうか。この21世紀の始まりの年に，大地に新しい学問の種をまき，世紀の半ばにはしっかりした太い木に育てあげ，黙っていてもその木蔭に多くの人達が集まって来て憩うというような豊かな大木にしなければなりません。

国の科学技術・高等教育政策に関連して

1995年に制定された科学技術基本法に基づいて作られた科学技術基本計画によって，過去5年間に17兆円の支出がなされ，大学関係にもかなり大型の研究プロジェクト経費が来るようになり，いろいろと研究成果があがっているのは歓迎のことです。京都大学でもいくつものプロジェクトが行われて来ておりますが，今後さらに多くの研究プロジェクトが採択され，より多くの優れた研究成果が出されることを期待したいと存じます。

しかしこの科学技術基本計画も本年3月で5年間の計画が終了することになり，現在次の5年間の基本計画の策定作業が行われております。この新しい計画では科学技術全般の推進とともに，研究開発の重点項目を鮮明にしております。また若手研究者の自立性の向上，任期制の広範な普及，産学官の連携強化，科学技術振興のための基盤整備など，広範な課題を提示しており，今後の京都大学における研究活動においても十分考慮すべきものと考えます。

昨年1年間にいくつかの注目すべきことが文部行政のレベルで決められております。まず，各国立大学に運営諮問会議をもうけること等，大学関連の法改正がなされ，昨年7月に京都大学運営諮問会議の

初会合が井村裕夫前総長を議長として開かれました。そして今後の京都大学の教育研究にとって非常に参考になる種々のご意見（「京大広報」No.550）をいただきました。

また、国立大学に対して大学評価を行うことが決定され、これを行うために学位授与機構が大学評価・学位授与機構に改組され、全学的な活動と専門分野の活動について、それぞれ教育・研究の両面から外部評価が行われることになりました。近く京都大学に対しても評価が行われることになっております。

文部省では従来作って来た卓越した教育研究拠点（COE）をさらに大学院の専攻単位でも作って行くことになり、学位授与率が高く活潑に教育研究活動を行っているところを指定する方針であります。京都大学は、本年度三つの専攻がその指定を受けましたが、他大学に比して決して多くはなく、今後さらに努力する必要があります。

なお、本年1月6日には文部省と科学技術庁とが統合され、文部科学省となります。大学等に関係する局としては、高等教育局、科学技術・学術政策局、研究振興局、研究開発局等となります。政府は教育をその重点施策の一つとしておりますし、教育改革国民会議や中央教育審議会からは種々の答申や提案が出されております。これらの一連の提案に基づいて種々の新しい施策が行われるようになるでしょうから、我々としても注意深く対応していく必要があると考えられます。

国立大学の法人化問題

さて一昨年来問題になっております国立大学の法人化の問題であります。昨年には重要ないくつかの動きがありました。まず5月始めに自由民主党は国立大学を独立行政法人通則法の下で法人化するには無理があり、「大学の特性を踏まえた措置を講じることにより、『国立大学法人』といった名称で独立行政法人化する」との方向を示しました。

5月下旬に開催された国立大学長会議においては、文部大臣は国立大学の法人化について調査検討をするための「国立大学等の独立行政法人化に関する調査検討会議」を設置することを表明し、四つの委員会（組織業務委員会、目標評価委員会、人事制

度委員会、財務会計制度委員会）がもうけられました。7月以降検討を行って来ておりますが、これらの委員会には国立大学協会から多くの委員を派遣し、国立大学側の意見を述べております。文部省では、本年中頃にはこれらの委員会においてある種の案をまとめる意向であると聞いております。

一方6月に開かれた国立大学協会総会においては、①独立行政法人通則法の下での法人化には反対である、②今後の国立大学のあるべき設置形態について「設置形態検討特別委員会」をもうけて検討する、③文部省の設置する「国立大学等の独立行政法人化に関する調査検討会議」に積極的に参加し国立大学協会の意向を強く反映させる努力をする、④長期的展望のもとに我国の高等教育のあるべき姿をえがくとともに、学術文化基本計画の策定をする議論の場をもうけるべきである、という4項目を決定しました。設置形態検討特別委員会は文部省の四つの委員会に対応させて四つの専門部会をもうけて、夏休み前から精力的に議論をしておりますが、これは独立行政法人通則法の傘の下でといった条件下での議論ではなく、本来的な国立大学の将来のあるべき姿の追求という立場で成案を得るべく努力をしているところであります。

京都大学の対外活動

最近では各国とも主要な大学は国際的によく認知された魅力のある大学となっており、良い教師・研究者とともに良い学生を国際的に集めようと、国境をこえて種々の努力をしております。これからの国際化の時代を考えると、できるだけ多くの京都大学の学生に外国の経験をさせ、国際的視野をもって逞しく生きる人物に育てることが大切と考えられます。京都大学に籍をおきながら海外の大学に留学する制度は、1年間の短期留学制度だけでなく、いろいろとありますから、積極的に外国へ出て行ってもらいたいものであります。

京都大学の国際的な活動として、昨年はいくつかのことがありました。東アジア研究大学協会（AEARU）は漢字圏の主要17大学の集りで、いろいろなテーマについてのワークショップを開催しておりますが、京都大学はこれまでWeb技術のワークショップを開催し、本年はコンピュータサイエン

ス・ワークショップを年末に開催する予定であります。学生の相互交流を目的とした会もいくつかあり、京都大学からは毎回複数名の学生を派遣しております。

また、環太平洋大学連合（APRU）は16カ国34大学で構成されており、電子図書館や遠隔講義、高速コンピュータネットワーク等についての相互協力など、種々の活動を行っております。さらに昨年は中国の北京大学、清華大学など主要7大学と日本の主要7大学との間で学長会議が持たれ、種々の情報交換、意見交換がなされ、今後より緊密な関係を作っていくことになりました。

京都大学の研究成果を海外に知らせるとともに研究協力をする大学としての活動は、主として日本学術振興会の支援によって行っております。本年1月13日には米国カリフォルニア州サンタクララにおいて、京都大学国際シンポジウム「ネットワークとメディアコンピューティング」を開催しますし、年末には英国ロンドンにおいて、「日本経済における最近の変遷」というシンポジウムを予定しております。またアジアを対象とした拠点大学方式による学術交流事業によって、マレーシア、タイ、シンガポール、インドネシア、韓国の各大学群とそれぞれ協力研究をしておりますが、今年からは中国の清華大学を中心とするグループと地球環境をテーマとした協力研究をスタートさせます。

京都大学には現在海外からの留学生が約1,100人いますが、文部省は留学生十万人計画を改めて明確にしましたので、京都大学でも、1年間の短期留学生とともに、今後留学生が増加していくことになるでしょうし、またその受入れに対してさらなる努力をしなければなりません。これは単に留学生のためという狭い考え方でなく、今後急速に国際化していく日本の大学の中で、京都大学が世界的にもよく知られ、学生や研究者を引きつける魅力のある大学になっていくために必要なことであり、留学生のための教育システムの充実、環境の整備に対してもっと配慮をしていくことが必要と考えます。

新しい組織

上に述べましたような全国的なレベルにおける学術研究の大きな流れと高等教育制度に関する動きの

中で、京都大学においても種々の新しい努力をしてまいりました。昨年4月には経済学研究科においてリフレッシュ教育の推進を主たる目的とするファイナンス工学講座がスタートしましたし、経済研究所には附属金融工学研究センターが出来ました。これらの組織の新設を記念して去る12月13、14日には東京と大阪において「21世紀の金融と金融工学の役割」と題する講演会を開催しましたが、定員の2倍をこえる参加希望者があり、大変な盛会となりました。

医学研究科においては、広く自然系学部の卒業生が医学研究の道に進めるよう、医科学専攻（修士課程）をもうけましたし、予防医学を中心とした社会健康医学系専攻（修士課程、博士課程）をもうけ、いずれも順調なすべり出しをしております。

社会の複雑化にともなう各分野の専門性の深まりに対応した専門職業人の養成は、これから新しく我々が努力すべき課題であります。そういった観点から、医学研究科に新しい組織の専門大学院制度を導入しましたが、今後他の分野でも検討する価値のあるものと考えられます。

来年度については、まず経済学研究科には今年度のファイナンス工学講座に引きつづいて事業創成講座を設置する予定であります。また、農学研究科と食糧科学研究所とを統合し、新しい農学研究科に改組すること、情報学研究科に生命情報学講座、化学研究所に附属バイオインフォマティクスセンターをもうけ、両者が協力して生命情報学を推進することなどの計画を進めております。全く新しい組織として国際的視野の下に産学官の連携を行う我国最大規模のセンターを発足させる準備もしております。さらに医学研究の成果を附属病院での実施にもっていくための橋わたしとなる実践的研究開発を行う探索医療センターを附属病院に設置する計画を進めております。

次年度以降については、なんといってもますます深刻となっていく地球環境問題に対して京都大学として真正面から立ち向かっていくことが必要であり、そのためにどのような教育研究体制をとるのが適当であるかについて、現在将来構想検討委員会の下に専門委員会をもうけ検討を進めております。

新しい施設

施設に関しては、まず総合博物館の建物が完成し、現在展示等内部の整備をしておりますが、5月には開館の予定であり、広く社会に開かれたものとなります。また平成9年に設立した総合情報メディアセンターの建物も完成し、メディアを利用した教育を進展させるとともに、多くのコンピュータ端末装置を学生が自由に利用できる環境を提供しております。

現在吉田地区で着工中の施設はいくつもあります。今年新たに着工するものとしては、全学共通科目の教育を少人数のクラスで行うための教室建物を総合人間学部に作りますし、老朽狭隘の著しい薬学部その他に建物を作る予定であります。本部事務棟も工事を始めており、2年後に完成したあとは1年かけて時計台の改修をし、百周年記念館として卒業生を含む京都大学構成員に広く利用していただけることになる予定であります。

一昨年決定いたしました桂キャンパスは順調に設計が進み、本年1月には建物の建設に着手し、2年後の3月には工学研究科のうち化学系および電気系の専攻が移転することになります。

以上のように、施設整備についてはいろいろと努力してまいりましたが、老朽化したものの改修も含めてまだまだ焼け石に水であり、狭隘状態は解消されません。各部局ともできるだけ早急にとという事情はありましようが、今後とも各部局の窮状をよく勘案しながらバランスよく整備を進めていきたいと考えておりますので、よろしくご理解をお願いいたします。

教育・研究の理念

京都大学は過去百年余の間、日本の学問の発展のためにたゆまぬ努力を続けてまいりました。そして多くの輝かしい学問的成果をあげるとともに、社会に対しても多大の貢献をして来ました。この教育研究活動を通じて多くの優れた人材を社会に送り出して来ましたが、これはいわば研究と教育の統一を理念にかかげたフンボルト主義に基づいたものであったといえるでしょう。

しかし、今日の学部教育が全面的にフンボルト主義でなされているとは言えないのではないでしょう

か。時代はこの百年間で明らかに変わりました。21世紀の幕開けに際して、京都大学のもつ他の大学にない特徴と誇るべき伝統を十分にふまえながらも、これを止揚し、新しい教育研究の概念と方向性を見出し、実践していく必要があるものと考えます。

そこで京都大学の教養教育をどうすべきかという問題と、それと関連して総合人間学部の今後のあり方について検討することが必要であるというところから、将来構想検討委員会の下に専門委員会をもうけて検討を開始いたしました。今日広く社会から、学生の勉学意欲の減退、教養の不足、学力の低下等が指摘されている中で、京都大学においても学生の学力低下が認められるという意見が多く、ここでその改善のための方策、カリキュラムの検討、教育体制のあり方など、あらゆる角度から十分な検討を行い、できるだけ良い教育研究のシステムを編み出さねばなりません。

京都大学は何といっても日本の代表的な研究大学でありますから、教育研究を新しい時代に合ったフンボルト主義で、より一層充実したものとしていく必要があるでしょう。学部でしっかりした基礎教育を受けた若人に大学院で専門分野の高度な教育を与えるほかに、社会の経験をふまえた人々の再教育、生涯教育など、学問に志す人は誰でも分けへだてなく受入れ、いっしょに学問研究を行っていくことも大切と考えます。

こういった状況をふまえて、京都大学はその研究活動とともに教育活動についても、どのような理念の下にこれを行っているのか、また行っていくべきか、ということを明確にし、そのためのあるべき大学の組織形態等についても検討することが必要であると考え、昨年末に京都大学の理念を検討する委員会を発足させました。出来るだけ多くの先生の考え方が反映され、21世紀の京都大学の使命とあるべき姿を描いていただきたいと考えております。

我々の決心

以上昨年一年間にあったことを中心にいろいろと述べてまいりましたが、ここで新しい世紀における学問とは何か、大学とは何か、教育とは何か、ということ、あらためて問う必要があると考えます。ぜひとも各自が自分のこととしてよく考えていただ

きたく存じます。

急速な社会の変化の中で、日本の大学は法人化問題でゆさぶられ、学生に対する教育の不十分さを非難されながら、教育研究施設の老朽化と狭隘さ、不十分な研究費等で苦しめられ、ややもすると自信喪失の状態に陥っているようにも見受けられますが、こういう時にこそ京都大学は毅然として日本や人類の進むべき方向をはっきりと示し、自信をもって教育・研究を行っていかねばなりません。京都大学はこれまで百年余、いろいろと歴史の荒波に鍛えられて来たのであり、今日押しよせて来ている荒波ごと

きに翻弄されるような軽薄な学問をして来たものではありません。今後いかなる状況になろうとも我々の行う教育研究、学問の道が崩れてしまうということはありません。激動の時代にこそ、新しい可能性とチャンスがあるのであります。このチャンスを利用して我々は夢を実現させるべく努力をしなければなりません。些細なことに右往左往せず、この自信と信念をもって、困難が待ちうける新しい世紀に門出していかうではありませんか。

今年も皆様にとりましてより一層意義深い年となりますよう祈念して、新年のご挨拶といたします。

大学の動き

新年名刺交換会

本学恒例の新年名刺交換会が、1月4日（木）午前10時から京大会館において、長尾 真総長をはじめ、岡本道雄、沢田敏男元総長、井村裕夫前総長、名誉教授、教職員約250人の出席を得て行われた。

はじめに長尾総長から新年の挨拶があり、次いで岡本元総長の発声による乾杯ののち歓談、午前10時45分散会した。

部局長の交替等

（新任）

農学研究科附属農場長

矢澤 進農学研究科附属農場長の任期満了に伴い、その後任として天野高久農学研究科教授（農学専攻耕地生態科学講座担当）が、平成13年1月1日同場長に任命された。任期は平成14年12月31日までである。



（再任）

留学生センター長

三好郁朗総合人間学部教授（国際文化学科言語文化論講座担当）が、平成12年12月16日留学生センター長に再任された。任期は平成14年12月15日までである。

外国人研究者との懇談会の開催

総長主催の「外国人研究者との懇談会」が平成12年12月14日（木）午後6時より京大会館において開催された。この懇談会は、本学において教育、研究に従事している外国人研究者と本学教官等との交流を促進するため、平成7年度より恒例行事となっており、今回は総勢180人の出席者を数え、賑やかな会となった。

会場では、そこかしこで談笑の輪が広がり、途中長尾 真総長の挨拶があり盛会のうちに、午後8時過ぎに閉会した。



事務局消防訓練・年末特別消防演習行われる

平成12年12月22日（金）に事務局消防計画に基づく事務局職員の総合消防訓練が午後2時から約20分間にわたり左京消防署の指導と協力を得て行われた。

訓練は、総勢150人の参加のもと消防車3台、屈折車1台が出動し事務局本館2階南側事務室からの出火を想定し、施設部押谷総務掛長の「訓練火事です。」との通報により始まり、通報連絡、初期消火、避難誘導、物品搬出、警備誘導、救護等の一連の総合訓練が行われ、その後、左京消防署員の指導のもと消火器放射訓練が行われた。

また同日午後3時から本部地区自衛消防団による

恒例の年末特別消防演習が実施され、屋外消火栓の位置及び水圧確認、自衛消防団の消防車による放水訓練が行われた。

なお、各部局においても、次のとおり実施された。

月 日	実施部局名
11. 2(木)	霊長類研究所
11. 15(水)	人文科学研究所
12. 4(月)	工学部
12. 14(木)	宇治地区
12. 26(火)	北部構内関係部局

平成12年度の停年退職教官

京都大学教員停年規程により次の教官（教授47人、助教授5人、講師4人、助手10人）が、本年3月31日付で退職の予定である。

部 局	氏 名	生年月日	講 座 名 等	研 究 分 野 等
総 合 人 間 学 部	高 橋 三 郎	昭和 12.12.12	人間学科 人間基礎論講座	戦争・軍隊についての文化社会的研究
"	小 岸 昭	" 12. 9.28	国際文化学科 文明論講座	ナチズムの研究、および隠れキリシタンと 隠れユダヤ人の比較研究

部 局	氏 名	生年月日	講 座 名 等	研 究 分 野 等
文 学 研 究 科	廣 田 昌 義	昭和 13. 2. 17	文献文化学専攻 欧米語学・欧米文学講座	17世紀フランス文学・思想の研究, ジャン セニスムとパスカルに関する研究, マザリ ナード研究
"	豊 田 昌 倫	" 13. 3. 31	文献文化学専攻 欧米語学・欧米文学講座	英語文体論の研究, 英語の文体 (スタイル) に関する共時的および通時的研究
"	加 藤 尚 武	" 12. 5. 18	思想文化学専攻 哲学・宗教学講座	哲学・倫理学 (特にヘーゲルを中心とした ドイツ観念論及び生命倫理, 環境倫理を中 心とした応用倫理学研究)
"	礪 波 護	" 12. 9. 6	歴史文化学専攻 東洋史学講座	中国古代・中世史, とくに行政機構の研究, 仏教と国家の関係, 文物資料の研究, 日本 中国文化交流史の研究
法 学 研 究 科	佐 藤 幸 治	" 12. 6. 9	公法専攻 憲法講座	自律的個人を基礎とする自由で公正な社会 をいかに形成・維持するかの観点から, 憲 法の解釈体系を構築する
"	鈴 木 茂 嗣	" 12. 5. 12	民刑事法専攻 刑事法講座	刑法と刑事訴訟法の交錯領域の研究
経 済 学 研 究 科	渡 邊 尚	" 12. 5. 30	経済動態分析専攻 比較制度・政策講座	経済政策類型論・資本類型論・ヨーロッパ の空間動態とライン河流域の原経圏, EU 統合と地域政策
理 学 研 究 科	曄 道 恭	" 12.11.17	物理学・宇宙物理学専攻 非線形物理学講座	プラズマの実験研究: プラズマの高周波加 熱及び高周波電流駆動の研究
"	鈴 木 孝 夫	" 12. 7. 20	物理学・宇宙物理学専攻 非線形物理学講座	磁場中における薄膜超伝導体の相転移に関 する研究
"	泉 邦 英	" 12. 4. 17	物理学・宇宙物理学専攻 物質物理学講座	結晶物理学, 特に有機結晶の成長と格子欠 陥の研究
"	瀧 本 清 彦	" 12.12. 8	物理学・宇宙物理学専攻 核物理学講座	原子核物理学の実験的研究
"	佐 藤 文 隆	" 13. 3. 23	物理学・宇宙物理学専攻 宇宙放射学講座	一般相対論とビッグバン, ブラックホール を中心とした宇宙物理の研究
"	廣 田 勇	" 12. 5. 7	地球惑星科学専攻 大気圏物理学講座	大気力学, 特に中層大気大循環および波動 力学に関する研究
"	阪 敏 朗	" 12. 4. 2	化学専攻 相関化学講座	鉄族錯体の電子状態に関する光学的・磁気 的研究
"	小 菅 皓 二	" 12.10. 4	化学専攻 無機化学講座	不定比化合物に関する研究
医 学 研 究 科	山 邊 博 彦	" 12. 4. 3	病理系専攻 基礎病態学講座	病理診断学的研究
"	中 山 宏太郎	" 12.11.20	病理系専攻 法医学講座	精神障害者 (含児童・少年・高齢者) に関 する立法と司法精神医学
"	篠 山 重 威	" 12. 5. 21	内科系専攻 臨床器官病態学講座	心筋の収縮と弛緩のメカニクス, 虚血心筋 における血管新生, 心不全の発生機序 (特 に, 免疫応答との関係)
医学部附属病院	伊 藤 和 彦	" 12. 8. 1	輸血部	輸血医学の研究

部 局	氏 名	生年月日	講 座 名 等	研 究 分 野 等
工 学 研 究 科	寺 島 泰	昭和 12. 4. 10	環境工学専攻 環境デザイン工学講座	都市物質代謝に関する研究, 地環境管理に関する研究, 水質制御に関する研究, 放射能環境保全に関する研究
"	手 島 清 美	" 12. 7. 2	機械工学専攻 熱流体工学講座	熱機関の総合熱効率向上, 環境適合性評価の観点からエネルギーシステム及び構成機器の性能に関する研究
"	岡 阪 令	" 12. 10. 8	機械物理工学専攻 物性工学講座	イオン 原子衝突における励起機構の分光学的研究
"	矢 部 寛	" 12. 8. 5	精密工学専攻 知能機械システム講座	流体潤滑軸受の作動特性解析と設計法の確立に関する基礎的研究
"	藤 田 治 之	" 12. 4. 26	原子核工学専攻 核エネルギー工学講座	イオン加速器を用いた核反応表面分析法による核融合炉材料に関する研究
"	岡 崎 敏	" 13. 3. 31	材料化学専攻 有機材料化学講座	電子移動反応過程のダイナミクス及びキャラクタリゼーションに関する研究
"	升 田 利史郎	" 12. 10. 16	材料化学専攻 高分子材料化学講座	高分子物質のレオロジーに関する研究
"	竹 内 賢 一	" 13. 3. 27	物質エネルギー化学専攻 基礎物質化学講座	新規炭化水素と関連有機活性種の合成と物性ならびに有機反応論の物理有機化学的研究
"	上 野 徹	" 13. 3. 22	物質エネルギー化学専攻 基礎物質化学講座	遷移金属錯体(ハイドライド), 反応速度, 質量分析, マススペクトルの電算機解析, 生体関連物質の微量分析
"	須 天 正 和	" 12. 5. 19	物質エネルギー化学専攻 触媒科学講座	有機金属化合物を経由した新規有機合成プロセスの開発
"	伊 藤 嘉 彦	" 12. 12. 16	合成・生物化学専攻 合成化学講座	有機合成化学・有機金属化学・高分子化学
農 学 研 究 科	吉 田 博 宣	" 13. 1. 14	森林科学専攻 緑地環境保全学講座	緑地環境の保全と創造に関する造園学的研究
"	上 野 民 夫	" 13. 1. 19	応用生命科学専攻 応用生化学講座	植物と病原菌の相互作用に関する化学と昆虫の生理を攪乱する薬剤の化学に関する研究
"	岩 村 俣	" 13. 1. 27	応用生命科学専攻 生物機能化学講座	生理活性物質の生物有機化学的研究, とくに植物ホルモンおよび植物の防御機構に関する化学的生化学的研究
"	宮 崎 昭	" 12. 10. 5	応用生物科学専攻 動物機能開発学講座	土・草・反芻動物を巡る家畜栄養生理学的研究, 国際畜産論, 牛肉の生産・流通・消費に関する国際比較研究
"	善 林 明 治	" 12. 11. 3	附属牧場	肉用牛の産肉生理および生産技術に関する研究
人 間 ・ 環 境 学 研 究 科	相 良 直 彦	" 13. 3. 10	人間・環境学専攻 自然・人間共生基礎論講座	真菌実験生態学、きのこを手がかりとしたモグラ学、生物共棲論などの研究
"	家 森 幸 男	" 12. 7. 29	文化・地域環境学専攻 環境保全発展論講座	循環器疾患のモデルの開発とその病因と予防に関する遺伝細胞学・病態生化学・病理学・栄養学・疫学的研究
"	豊 島 喜 則	" 12. 11. 28	環境相関研究専攻 生物環境システム論講座	光合成光エネルギー変換系の環境応答及び発現制御機構についての生物物理学・分子生物学的研究

部 局	氏 名	生年月日	講 座 名 等	研 究 分 野 等
エ ネ ル ギ ー 科 学 研 究 科	新 宮 秀 夫	昭和 13. 2. 4	エネルギー社会・環境科学 専攻 社会エネルギー科学講座	エネルギーの利用に関する工学的および社会工学的研究
"	小 野 勝 敏	" 12.11.17	エネルギー応用科学専攻 エネルギー応用プロセス学 講座	高温化学熱力学およびチタン精錬に関する研究
アジア・アフリカ 地域研究研究科	坪 内 良 博	" 13. 1. 3	東南アジア地域研究専攻 地域進化論講座	東南アジアの人口と社会に関する研究
情 報 学 研 究 科	池 田 克 夫	" 12.10.11	知能情報学専攻 知能情報ソフトウェア講座	情報を抽出、認識、理解、記述して人の知的活動を支援する処理系の実現法に関する研究
生命科学研究科	佐々木 隆 造	" 13. 2. 25	統合生命科学専攻 応用生物機構学講座	赤血球造血因子エリスロポエチンに関する研究、酸素による遺伝子発現制御と神経細胞死に関する研究
化 学 研 究 所	小 林 隆 史	" 13. 3. 30	構造解析基礎研究部門	有機結晶の成長、格子欠陥と高分解能分光型電子顕微鏡に関する研究
"	片 野 林太郎	" 12.11.30	構造解析基礎研究部門	放射線計測学・新しい放射線検出器及び周辺回路の開発と物理学実験への応用
人文科学研究所	狹 間 直 樹	" 12. 8. 30	文化構成研究部門	中国近現代史の政治思想史分野の研究
エ ネ ル ギ ー 理 工 学 研 究 所	井 上 信 幸	" 12. 7. 31	エネルギー生成研究部門	核融合炉の実現を目的とする高温プラズマの挙動に関する研究、ならびにプラズマの産業応用研究
再 生 医 科 学 研 究 所	岡 正 典	" 13. 3. 5	再生医学応用研究部門	骨格系生体材料の開発に関する研究
防 災 研 究 所	田 中 正 昭	" 12.11.21	大気災害研究部門	盆地の局地循環風、盆地霧の発生・発達・消滅、塩風害等局地気象に関する研究
"	今 本 博 健	" 12.12. 9	附属災害観測実験センター	水流の乱流構造、河川構造物の水理機能、水害の防止・軽減法等の実験水理学に関する研究
"	島 田 充 彦	" 13. 2. 15	附属地震予知研究センター	高温高压下の岩石・鉱物実験による地球内部構造および地震発生機構の研究
"	西 潔	" 12. 5. 12	附属火山活動研究センター	地震学および測地学的手法による火山体の構造と噴火予知の研究
基礎物理学研究所	久 保 禮次郎	" 12. 4. 7	時間空間理論研究部門	素粒子論における弦理論に関する研究、および拘束系の力学と可積分系の力学に関する研究
"	富 田 憲 二	" 12. 7. 16	宇宙基礎論研究部門	①一般相対論の宇宙モデル、②銀河・銀河団・大規模構造の形成と進化、③重力レンズ等の宇宙論的観測の研究
数理解析研究所	森 正 武	" 12. 8. 26	無限解析研究部門	応用数学、とくに数値解析に関する研究
原 子 炉 実 験 所	笹 島 和 久	" 12. 5. 5	原子炉安全管理研究部門	原子炉中性子放射化分析法を用いた環境生体試料中の微量金属の動態に関する研究
"	宇津呂 雄 彦	" 12. 8. 19	中性子科学研究部門	冷中性子・超冷中性子の生成と低速中性子実験並びに中性子物理に関する研究

部 局	氏 名	生年月日	講 座 名 等	研 究 分 野 等
原 子 炉 実 験 所	岩 田 豊	昭和 12. 8. 4	中性子科学研究部門	中性子回析法及びX線回析法を用いた，強誘電体及び強弾性体の構造決定とその相転移メカニズムの研究
"	山 田 繁	" 13. 3. 1	応用原子核科学研究部門	原子核構造の実験的研究
"	北 岡 祥 伯	" 12. 12. 25	放射線生命科学研究部門	原子核反応の化学的効果および中性子捕捉療法用ホウ素化合物の研究
霊 長 類 研 究 所	加 納 隆 至	" 13. 3. 16	社会生態研究部門	霊長類社会学・人類学，野生ボノボ研究の創始，その社会関係，性行動の研究とチンパンジーとの比較研究
東 南 ア ジ ア 研 究 セ ン タ ー	北 野 康 子	" 12. 7. 31	資料部	東南アジア研究に関する研究資料の目録情報
放 射 線 生 物 研 究 セ ン タ ー	池 永 満 生	" 13. 1. 5	放射線システム生物学研究部門	放射線，化学発癌剤で生じる DNA 損傷の修復機構の研究，宇宙放射線の遺伝的影響に関する研究
生 態 学 研 究 セ ン タ ー	中 西 正 己	" 12. 6. 25	水域生態研究部門	生物過程 - プランクトン群集間の有機的連関 - を通しての水界の物質循環の研究

平成13年度予算案の概要

平成13年度予算編成は，我が国の新たな発展基盤の構築に資する施策に一層の重点化を図りつつ，公需から民需へのバトンタッチを円滑に行い，我が国経済を自律的回復軌道に確実に乗せるとの観点に立って編成するものの，なお厳しさを増している財政状況に鑑み，財政の効率化・質的改善を図ることを基本的な考え方として編成されているところである。

予算額案

区 分	平成12年度	平成13年度	比較増 減額	増 減 率
国 の 一 般 会 計	84兆9,871億円	82兆6,524億円	2兆3,347億円	2.7%
国 債 費	21兆9,653億円	17兆1,705億円	4兆7,948億円	21.8%
地 方 交 付 税 等	14兆9,304億円	16兆8,230億円	1兆8,926億円	12.7%
一 般 歳 出	48兆 914億円	48兆6,589億円	5,675億円	1.2%
文 部 科 学 省 一 般 会 計	6兆5,129億円	6兆5,784億円	655億円	1.0%
(うち特会繰入)	1兆5,530億円	1兆5,727億円	197億円	1.3%)
国 立 学 校 特 別 会 計	2兆7,028億円	2兆7,428億円	400億円	1.5%
人 件 費	1兆4,736億円	1兆4,884億円	148億円	1.0%
物 件 費	1兆2,292億円	1兆2,544億円	252億円	2.1%

(参 考)

区 分	平成11年度	平成12年度	比較増 減額	増 減 率
国 立 学 校 特 別 会 計	2兆7,261億円	2兆7,028億円	233億円	0.9%
(うち物件費)	1兆2,451億円	1兆2,292億円	159億円	1.3%)

このような中で，平成13年度文部科学省予算は，教育改革や科学技術・学術の振興，文化・スポーツ立国の実現に向けて，各般の施策の積極的な展開を図るための予算が確保されているところである。

国立学校特別会計の予算は、老朽・狭隘化施設の解消など国立大学等を取り巻く喫緊の課題に積極的に取り組む一方で、教育・研究経費の一層の効率化・重点化を行うとともに、附属病院収入や学校財産処分収入等の自己財源の確保を最大限図るなど、従来にも増して極めて厳しい状況での予算編成となっている。

なお、一般会計のうち大学関連の主なものとして

科学研究費補助金の拡充 1,419億円 1,580億円（161億円 11.3%増）

ポストドクター等1万人支援計画の推進 7,434人 7,588人（154人増）

などが図られている。

平成13年度国立学校特別会計予算内示（本学関係）の概要

平成13年度国立学校特別会計予算内示の本学関係の主な事項の概要は、以下のとおりである。

事 項	教官数	学 生 数	備 考
専攻の設置等 専攻の設置	人	人	
	(1)		教官数は食糧科学研究所から振替
(1)			
(農学)食品生物科学専攻	28	21 11	
専攻の整備	28	修士 25, 博士 11	
(農学)農学専攻	6	3 1	
	6	修士 7, 博士 3	
(農学)応用生命科学専攻	(1)		
	(1)		
入学定員の改訂	19	14 7	
(農学)生物資源経済学専攻	19	修士 23, 博士 10	
学科の再編成		修士 1	
農学部		3学科(300) 6学科(300)	
専攻の整備			
(経済学)組織経営分析専攻	4		
	5	修士 2, 博士 1	
(情報学)知能情報学専攻	2		
(社会人ブラッシュアップ教育)	2	修士 7, 博士 2	
教育実習施設の整備			
(法学)法政実務交流センター	(2)		
全国共同利用施設の改組(新設)	(1)		
生態学研究センター	18		(時限10年)
全国共同利用施設の整備	14		
放射線生物研究センター	2		
学内共同教育研究施設の新設	2		
国際融合創造センター	(4)		
学内共同教育研究施設の改組	11		
	12		
東南アジア研究センター	(8)		
京都大学桂地区等整備計画策定調査経費	(9)		
桂キャンパス用地取得費	27		
特殊診療施設の新設	27		
探索医療センター	8		
研究所の廃止	14		
食糧科学研究所	(1)		農学研究科へ振替
附属施設の新設	25		
(化研)バイオインフォマティクスセンター	5		核酸情報解析施設の廃止・転換
	8		(時限10年)

教官数欄の()は客員分で外数

部局の動き

原子炉実験所 大阪府・熊取町合同防災訓練に参画

大阪府と熊取町主催による合同防災訓練を去る平成12年10月28日（土）熊取町立総合体育館（ひまわりドーム）及び隣接する熊取町民グラウンドで実施した。訓練は、災害対策基本法，原子力災害対策特別措置法を踏まえ，第1部原子力災害訓練，第2部地震災害訓練の二部構成で行われ，原子力防災関係機関及び住民からなる71団体約2,000人と車両140台，航空機4機が参加した。

とりわけ，第1部原子力災害訓練は，原子炉実験所が合同訓練実行委員として大阪府・熊取町とともに企画立案してきたものである。この訓練では，本実験所の研究用原子炉（KUR）制御室内の放射線監視盤で火災が発生したとの想定で，地域住民をひまわりドームに集め，あらかじめ撮影した本実験所の緊急時訓練のビデオ映像を進行用シナリオとして



訓練等が行われた。

今回の災害訓練を通じて，関係機関相互の協力体制の強化と地域住民の原子力防災に対する理解の促進が図られた。
（原子炉実験所）

日誌 2000.11.1 ~ 11.30

11月7日 評議会

〃 新キャンパス・建築合同委員会

〃 教育研究振興財団助成事業検討委員会

10日 Michael NORTON 英国大使館科学技術参事官来学、総長及び関係教官と懇談

10日 大韓民国 徐 燉珏 大韓仏教信仰院理事長他3名来学、総長と懇談

14日 核燃料物質管理委員会

15日 国際交流委員会

21日 評議会



訃報

このたび、前川^{まえかわみちお}道郎名誉教授、山下^{やましたきよし}清総合人間学部助教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に両氏の略歴、業績等を紹介しします。

前川 道郎 名誉教授



前川道郎先生は、平成12年11月10日逝去された。享年69。

先生は、昭和29年京都大学工学部建築学科を卒業後、本学工学部助手、教養部助教授を経て、同53年教養部教授に就任、図学を担任された。昭和57年九州大学工学部建築学科教授に転出され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。その後、平成7年九州大学を停年により退官され、九州大学名誉教授の称号を受けられた。退官後

は、大阪産業大学教授として活躍しておられた。

先生のご専門は西洋建築史、建築論であるが、西洋中世建築、とくにゴシック建築の空間論的研究において優れた業績をあげられた。これらの研究は建築学の分野を越えて美学・美術史学にまで広く影響をあたえた。最近は、プロテスタントにおける教会建築の空間論的研究に研究の粋をひろげておられた。主な著書に『ゴシックと建築空間』、『新建築学大系6 建築造形論』等がある。

(総合人間学部)

山下 清 総合人間学部助教授



山下 清先生は、平成12年12月5日逝去された。享年52。

先生は、昭和49年京都大学経済学部を卒業し、同大学院経済学研究科博士課程単位取得退学、神戸学院大学経済学部専任講師を経て、同58年京都大学教養部助教授に就任された。平成4年教養部の改組に伴い、総合人間学部助教授となられた。

先生は、理論経済学を専攻され、新古典派の経済理論に企業理論や搾取理論、一般不均衡理論を取り入れることで理論の豊富化を計られた。さらに道徳

的危機や逆選抜等による情報の不完全性に着目し、それによる金融市場の複雑化現象の解明を試み、これらを通じて社会経済の現実により接近した理論モデルを構築し、この面での優れた業績をあげられた。

また教育面では、教養部と総合人間学部における経済学の基礎教育ならびに社会システム論分野での講義と演習、さらに経済学研究科と人間・環境学研究科でのマクロ経済のミクロ経済学的基礎づけをテーマにした講義を通して学生と後進に対する熱心な指導にあたられた。

(総合人間学部)

随想

棋の起源

名誉教授 旦代 晃一



1995年からの2年間に国際日本文化研究センターにおける共同研究「将棋の戦略と日本文化」に共同研究者として参加する機会を得た。その際に知的刺激に恵まれていくつかの知見を得た。その一部を簡単に紹介してご批判を仰ぎたいと思う。

この小文においては便宜的に将棋と起源を同じくするゲームを総称して棋とよぶことにする。

棋の起源についての通説をまず紹介する。

インドに昔チャトランガという8×8の枰目の盤上で4隅の8枚ずつの駒を並べて4人で交互に1手ずつ駒を動かして遊ぶ棋が生まれ、それが棋の共通の先祖であり、西漸してチェスになり、東漸して(中国の)象棋、(日本の)将棋になったというのがその通説の要約である。さらに将棋について補足すれば、中国からの伝來說と、象棋と将棋の差異の大きさに起因する東南アジアからの伝來說に二分される。

日本における最古の文献は二中暦で、玉将、金将、銀将、桂馬、香車、歩兵の駒と玉将一枚になれば負けであることなどの記述があり、それから持駒使用では無かったことがわかる。盤が8×8か9×9かが問題になるが、9×9ならば後手が先手の指手を線対称に真似をすれば負けないことから8×8である。最古の出土駒は1058年の興福寺駒である。その出土物は二中暦の記述と矛盾しない。

日本の将棋では四、五百年前までは王将は用いられず玉将を用いた。中国、朝鮮半島でも現在にいたるまで王の意味を持つ駒はない。象棋で王にあたる駒は将または師である。東アジア以外ではすべて王にあたる名前の駒が存在する。この事実は東アジアの棋とそれ以外の棋が早く分かれたという小さい心証を私に与えている。

中国で最古の具体的な棋にふれた書は『玄怪録』である。怪奇小説であるこの書には、版を選べば将棋の金、香を思わせる駒の記述がある。日本の外で金、香の存在にふれた史料は他にないのでこの記述

は中国経由を示唆している。

近代日本で棋の起源について学術的な論考を著したのは幸田露伴である(明治33年)。かれは棋の起源について世界の通説を紹介した。ところで冒頭に述べた世界の通説は当時英国を主とするヨーロッパで形成されたもののようである。しかし最近では証拠とされたサンスクリット語のマハーバーラタなどの文献の記述が必ずしも棋を意味していないという意見が強まりつつあるようだ。当時のアリア民族優越思想を背景にしたと思われる通説は考え直すべき時期がきたようだ。チャトランガも棋の祖先にしてはゲームの構造が複雑すぎて不自然である。

棋の進化については史料が極めて乏しい。しかし棋は改良について保守的であり、ある種の方向性をもつのでいくらか推測が可能であると考えられる。

象棋ではチェスや将棋と異なり、罫の交点上に駒を置き、8×10の盤を使用する。このことは将棋の中国経由の渡来にたいする反論の根拠でもあった。

私は、棋の先祖が4×8の盤を用い、チェス・将棋ではそれが2倍体に進化し、象棋では象という駒を追加するために交点置きにしたのち2倍体を作ったとする仮説を設定すれば、棋の進化がうまく説明できることを冒頭の共同研究で口頭発表した。象棋はさらに炮という駒を加えて完成にいたる。考古学・書誌学的研究が進むことを期待し、正否を弁じうる日のくることを望みたい。

(たんだい こういち 元総合人間学部教授

平成7年退官、専門は幾何学)

洛書

近頃思うこと

坂田 完三

いつも最前列で熱心に私の講義に耳を傾け、ノートを取っている学生がいた。さぞや良い成績を修めてくれるものと期待して期末試験を見てみた。そして、その結果に愕然とした。答案には確かに何かが書いてあるが、およそ良い点数を与えることができるものではないのである。また、試験で名前を書いただけで全く解答しようとしないう学生がいた。てっきりカンニングでもしようとしているのかと試験中ずーっと私の注意はその学生に注がれた。驚いたことに、試験が終わるまでその学生はついに解答をしなかった。後で理由を聞いてみたが要領を得た答えをついぞ聞くことはできなかった。

上記の二つの出来事は私にとって全く不可解、自分の考えが遠く及ばない人達がいることを思い知らされた。そうして、その後はどうしてこのような人達がでてきたのかと気がかりでしやうがなかった。

前者の場合、表現は悪いかも知れないが、恐らく彼の能力は伸びきったゴム紐の様に、もはや新しいことがらを学び自らをさらに高める余裕がないのである。彼は日頃大変な努力をしていることを考えると、彼はこれで幸せであったろうかと考えさせられるのである。彼にはもっと適した道があったのではないかと...

彼は、いわば入試戦争の犠牲者であろう。良い(評判の?)大学に入るために、良い高校へ、そのためには...と。親の欲望のままに子供が追い立てられ、その子供達を預かった多くの先生達は、少しでも良い大学へ一人でも多く送り込むことに専念し、全ての教育活動がこの点にフォーカスされ、受験の役に立たない遠足や修学旅行までもないがしろにされ、子供も親も先生までもがそれぞれの子供に本当に向いている道を見つける機会を逸してしまったのではないかと?後者のように試験に解答せず、無為に試験時間を過ごしてしまう学生も何かを見失っているのであらう。

大学進学至上主義が蔓延した結果である。世の中が多様な人材で成り立っていることを忘れてしまったためではないか?社会を支えるには様々な分野に優秀な人材が必要である。あらゆる分野に職人が必

要なのである。職人の相対的な社会的地位を下げてしまったわが国の教育体制の結果ではないかと思う。近年の教育改革(改悪?)はアメリカ一辺倒といってもよい。ヨーロッパ社会の教育体系も見習うべきではないか。そうしてわが国に適した独自の教育体制を考え直す時と痛感する。

いつの時代においても、本当に優秀な学生(数%からせいぜい10%)はどのような体制になろうが関係なく立派に育って行くものであるが、問題は正規分布の中心、最も多い学生達の教育である。一人一人の顔と個性、能力を把握できる少人数教育の徹底が上記の問題解決の鍵であろう。戦後のベビーブームも去り、就学児童数が大幅に減少し始め、間もなく希望者はほとんど無試験で大学に入学できる日が来ると言われている。これでわが国もようやく本当の教育を考えることができるのであろうか?

(さかた かんぞう 化学研究所教授)



公開講座

終了報告

農学研究科森林科学専攻・木質科学研究所公開講座「森と文化」

農学研究科森林科学専攻と木質科学研究所は、平成12年10月21日（土）、22日（日）の両日午前10時から午後4時まで、農学研究科大講義室において公開講座を開催し、約70人が受講した。

この講座では、一般市民を対象に農学研究科森林科学専攻と木質科学研究所で展開されている研究成果を選び、「森と文化」をテーマとし、7件の講義と、大文字山コース、吉田山コース（真如堂から法然院、南禅寺に至る）、京大北部構内コース（農学研究科附属演習林本部試験地標本林など）の3コースに分かれての樹木実習を行った。

今回の受講者は、会社員、学生、主婦などと幅広く、活発な質問もあり、森林、木材に対する関心の高さを示すことになった。講義題目と講師は以下のとおりである。

「にわ」、「その」、「もり」=人の暮らしと緑の文化=
グリーンツーリズム

照葉樹林文化を支えるシイ・カシ林

日本およびヨーロッパにおける近代木橋の現状

竹・竹炭・竹酢液

埋蔵文化財の木

木が大きくなるしくみ

実習

農学研究科教授 吉田 博宣

農学研究科助教授 松下 幸司

農学研究科助教授 神崎 護

木質科学研究所教授 小松 幸平

木質科学研究所助手 野村 隆哉

木質科学研究所教授 伊東 隆夫

農学研究科教授 野淵 正

農学研究科教授 藤田 稔

農学研究科助教授 神崎 護

農学研究科助教授 高部 圭司

農学研究科助手 金子 隆之

農学研究科助手 山崎 理正

話題

2000年京都電子図書館国際会議：研究と実際

情報学研究科と附属図書館は、我が国初となる電子図書館国際会議を英国図書館（BL）、米国国立科学財団（NSF）と共催で、平成12年11月13日（月）から16日（木）までの間、欧米、アジア各国の研究者・図書館関係者約200人の参加を得て附属図書館AVホールを会場に開催した。国際会議では、各国各機関で取り組んでいる最新の電子図書館システム、ウェブを利用する基盤技術、著作権問題、国際協力の在り方等に関し、英語と日本語の2種のセッションを合わせて約100件の研究発表・パネル討論が行われた。



また、13日に行われた電子図書館に関する図書館長会議においては、世界の電子図書館の健全な発展を目途とする行動要綱作成の呼びかけがあり、14日のパネル討論の中で、①相互協力と情報交換のためのネットワーク作り、②メタデータに関する国際標準の作成努力、③著作権に係る権利制限範囲の拡大のアピール、④財政的支援の強化要請、⑤電子図書館が広く使われるため積極的な普及活動、を内容と

する「電子図書館京都コミュニケ」が採択された。

なお、本会議は「研究と実際」という趣旨にもみられるように、長尾 真総長の主導で情報学研究科のコーディネート、附属図書館を構成員として実施されたものであり、研究者と実務者が同じテーマで一堂に会したという点でも意義があった。

（大学院情報学研究科，附属図書館）

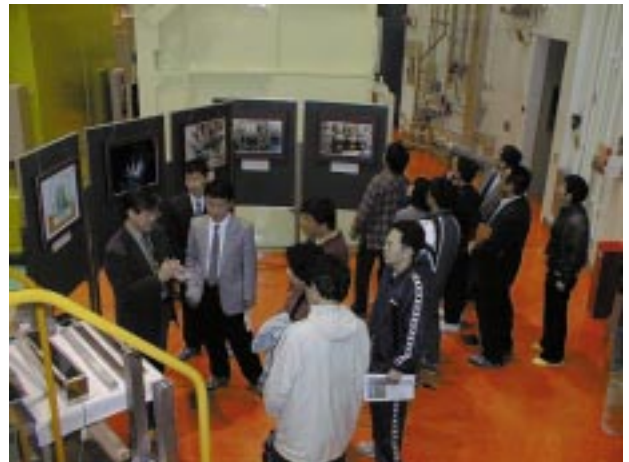
原子炉実験所理科教育学習交流懇談会の開催

原子炉実験所では、平成12年11月15日（水）、地域広報活動委員会の事業の一環として第2回理科教育学習交流懇談会を開催した。今回の懇談会は、泉南郡市中学校教育研究会「教科別一斉研究会：理科部会」の教員約20人と同実験所教官約10人が参加した。

懇談会に先立ち行われた内海博司原子炉実験所附属原子炉応用センター長による講演「放射線と生命」は、授業に持ち込めるような比較的身近な話題が盛り込まれており、参加した理科教員は熱心に聴き入っていた。続く懇談会では主に、理科教育現場が抱える問題とそれに対して果たせる実験所の役割について話し合われ、種々意見が交わされた。

また、最後には施設の見学を行い、ここでも積極的に質問が飛び交うなど、参加者の情熱が終始感じられる充実した懇談会となった。

（原子炉実験所）



炉室内の見学

